

江戸時代を代表する彫物大工 成田山に「二十四孝」の名作

建築物や彫刻美に
外国人も感動

成田山の本堂正面の広場に立つと「おお、すばらしい!」「美しい!」「大きな建物だ!」という感嘆の声が起こる。

なかでも、三重塔の華麗な色彩を施した建築美に一段と目を輝かせる。

古い歴史を持つ中国の人々も、京都、奈良を見学してきた欧米の人々も、成田山と門前町が、一体となった地域の風格に様に感動するという。

平行滑走路がオープンし、空港旅客が1・5倍、内外の観光客が増大していく中で、成田山に内在する寺社建築や彫刻美の伝統文化が、アピールされる時代が到来したようである。

ここに、その一つである釈迦堂の「二十四孝」を彫った彫物大工、嶋村俊表に焦点を当てて紹介してみたい。

嶋村俊表（しまむら しゅんびょう）

18世紀中頃、江戸の彫物大工御三家の一つ、嶋村家の第八代目として活躍。成田山新勝寺の三代目本堂（現在の釈迦堂）の四面の扉にある二十四孝の彫刻を手がける。川越氷川神社本殿、田無神社本殿の彫刻とともに江戸期日本文化の粋ともいえるべき代表作とされている。

嶋村家は江戸の 彫物大工御三家の一つ

嶋村家の系譜をたどってみると、俊表は代々彫物大工を継承する家柄で、関東で彫物を多用した建物が建てられるようになった18世紀中頃から、江戸においては、石川家（下谷）、後藤家（京橋）、嶋村家（浅草）と彫物大工御三家の一つとなっていた。（村松梢風著『近世名匠列伝 改造社版』）

また伊東龍一（熊本大学助教授）の文

献等によれば、嶋村家の元祖八郎左衛門俊元は、江戸彫工元祖村井小十郎正俊の甥であり、かつ門人として金龍山浅草寺屋根上の力士及び五重塔その他諸々の彫刻をし、万治・寛文年間（一六五八―一七二〇）の頃、活躍した。

二代目円鉄は俊元の子で、通称八郎右衛門、後に藤八入道円鉄と号し、剃髪して諸国を遍歴している。

茨城県大和村の雨引山安養院の龍成田山新勝寺三重塔の十六羅漢、芝山仁王尊本堂、茨城県大和村の染法寺本堂（宝永7年＝一七二〇）、同じく茨城県桜川村の大杉神社の玉垣（正徳3年＝一七二三）の彫刻等をはじめとして、江戸及び諸国にその作を残した古今の名匠と言われ、享保5年（一七二〇）に没している。

六代目になって俊規という人が、倅の俊矩と二人で山梨県の身延山諸皇の彫刻をしたということが伝えられ、八代目俊表に到り、さらに十代目俊明は

成田山の建築物の各所に
多くの作品を残した円鉄

両国回向院本堂の欄間に十六羅漢を彫刻しており、まさに彫物大工の名家にふさわしい系譜である。



嶋村俊表の作品のある
三代目の本堂・釈迦堂

元禄13年（一七〇〇）、37歳で新勝寺の住職となった昭範は、翌年3月、三代続きの事業であった新本堂（現在の光明堂）を完成させた。新本堂は総朱塗りで、十間に八間、高さ五丈余の大建築であった。この時の大工棟梁は近江国坂田郡柏原の人で石井又左衛門家次、彫刻が嶋村円鉄の作であった。

この円鉄の本堂の彫物は、現在の光明堂にあり、正面枅組の上（通称面戸板といわれる部分）に、中央に葉牡丹を左右に獅子鼻、象鼻を刻み込み、奥に入って大日如来の背景に炎を模した彫刻が見られる。

さらに、享保7年（一七二二）11月



釈迦堂にある二十四孝の彫刻12面の中の曾参(左)と孟宗(右)(1面に2話ずつ計24話)

照範上人の建立した「一切経堂」の正面左右と両側面に彫刻をはめ込んだ火頭窓四面がある。作品銘はないが、嶋村円鉄の刀と推定されている。(『新修成田山史』)

この本堂建立後、照範46歳(一七〇九)の春、大日如来の光芒とともに真言八祖が現れ、「この地に塔を建てよ」というお告げを受け、夢かと思えたが、照範はここに三重塔を建てる決心をし、実際に工事に着手したという。この工事には佐倉藩主稲葉正通、二代目市川团十郎等も協力し、3年の歳月を費やし完成した。

その後、多年の風雨で損傷が激しく、宝暦7年(一七五七)照範上人の代に菅替えをし、享和3年(一八〇三)照範上人の代に修理されたものが現在に残された。

三重塔は、高さ90余尺の三層塔で、五間四面、塔内には「心の柱」と呼ぶ主柱があり、塔頂から吊り下げて構造上の安定を図った。各層の一枚垂木には雲水の彫刻を施し、周囲の十六羅漢の彫刻は無間堂嶋村円鉄の作であった。外部の装飾には、初層のみでも一寸五分角の金箔一万九千枚をはじめ、岩紺青九斤半、岩緑青九斤、光明朱一貫匁という多量の顔料を使用し、金、朱、紺、緑でみだされた華麗な外観を呈した。成田山の三重塔が、装飾過剰と評される所以であるが、江戸及び周辺農村からの参詣者を迎える成田山のシンボルとしてのこの三重塔が、当時の民衆の眼を奪うに足る化政期特有の美を備えた作品であったことは疑いない。

江戸期日本文化の粋と評価される二十四孝の彫刻

時代を下って、嘉永6年(一八五三)成田山は中興第十一世照範上人(一八一〇〜一八六九)の時代を迎え、先住からの本堂の建立事業が引き継がれた。44歳で住職にのぼった照範は、半年

後、新本堂(現在の釈迦堂)の建立の許可を得た。折しも天保改革で参詣者も減り、寺内に反対者もいたが、照範は江戸から近郷近在を歩き協力を請い、藩主堀田正睦の援助を受け、6年を費やして18万両の寄進を達成、この大工事を完成させたという。

「新本堂は十四間四面、高さ六丈八尺の大伽藍で、屋根は入母屋造りの銅板瓦葺き、総構造りで四方に廻縁がある。正面須弥壇上には、本尊不動明王を祀り、左右に二童子、別壇の左右には、四大明王が安置された。四面の扉にある二十四孝の彫刻は嶋村俊表の作であった。」(『成田不動の歴史』村上重良著)

ここで二十四孝についてふれると、中国の伝承で二十四人の孝行な子弟の逸話が感銘深く彫刻されていることに注目したい。

例えば「孟宗」の物語は、真冬の寒い日、年老いた病の母が粥を食べたいと申し、孟宗は竹林へ行き竹を抱いて泣いていたところ、たちまち地が裂けて竹が出てきて、孟宗は、母に粥を食べさせることができたという。雪中の筍掘り」という話が刻まれている。(『法談』第33号・釈迦堂の「二十四孝」の解説・白鳥照善著)

こうして二十四孝の逸話の二つ二つには、現代社会の家庭が一樣に抱える

問題を解く鍵とも言つべき、中国古来の孝道の奥深い教えが秘められている。そうした意味で二十四孝は、彫刻、逸話の表現において俊表の傑作といえるのである。

この「二十四孝」については、同じく俊表の彫刻である川越の氷川神社本殿、田無神社本殿(平成13年文化財公開事業で最高賞を受賞)と並んで「江戸期日本文化の粋」と評価される代表作となっている。

それは桃山、江戸時代になって東照宮を初めとする彩色や彫物で飾った社寺が各地に建てられる中で、桂離宮にみられる装飾に頼らない美が評価され、さらに江戸末期において彩色しない素木の彫物として完成したのが俊表らの作品だというのである。

田無神社の宮司であり、医師であり、津田塾大学で教鞭もとる賀陽清は、「嶋村俊表が心血を注いで彫り上げた二十四孝の彫刻に不足するところは何も無い。天才に特有な極限の表現をそこに見出し、ただ驚嘆し、震撼するばかりである」と賞讃している。

二十四孝図を含めた釈迦堂は国の重要文化財に指定されているが、それ以前に、成田の貴重な「文化遺産」であることを考え、市民としても、大切に後世に残していきたいものである。

(文中敬称略)